■研究十二月往来〈278〉

「ものすごし」小考

井上　愛

金春禅竹作と確実視される曲の特徴のひとつに、特定の語彙の多用が挙げられる（味方健「金春禅竹の嗜好と情調」『能の理念と作品』和泉書院、一九九九年）。本稿では、「ものすごし」の語に着目し、禅竹作品における特徴の一端を考えてみたい。

「ものすごし」は、「すごし」に接頭語がついた語で、非常に恐ろしいさまや気味が悪いさまを表す。（『日本国語大辞典』）。はじめに、「すごし」とはいかなる語なのかを概観していく。

勅撰集・私家集ともに「すごし」の用例は少なく、歌語としてあまり取り上げられなかった。そのなかで西行が「すごし」を五例詠んだことは注目される。糸賀きみ江氏によると、西行が詠んだ「すごし」とは、「心に強烈な戦慄や衝撃を感じさせるような物事の状態」に感動し、「心が冷えていくような寂寥感」を表現したものとする（糸賀きみ江「西行歌のすごし」『中世の抒情』笠間書院、一九七九年）。次に掲げた和歌の引用は『新編国歌大観』に拠る（以下、傍線は私に付す）。

ふるはたのそはの立木にゐる鳩のともよぶ声にすごきゆふ暮（『新古今和歌集』巻十七・雑歌・1676）

ふきわたす風にあはれをひとしめていづくもすごき秋の夕ぐれ（『山家集』上・秋・289）

なきあとをたれとしらねどとりべ山おのおのすごきつかの夕暮（『山家集』中・雑・848）

ゆふざれやひばらのみねをこえ行けばすごくきこゆるやまばとのこゑ（『山家集』下・雑・1052）

山ふかみまきのはわくる月かげははげしきもののすごきなりけり（『山家集』下・雑・1199）

右に挙げた一首目の「ふるはた」を、松岡心平氏は「放棄された焼畑」とする（松岡心平「西行の「ふるはた」の歌」古典文学会会報、115号）。松岡氏は、林立する焼け焦げた木々に聞こえる鳩の鳴き声は、「葬地を思わせるような夕暮の情景」と述べる。西行には荒野や枯れ野を題材にした歌が少なくない（久保田淳「西行の時空」『国文学』30－4号）。「ふるはた」や「とりべ山」などの悽愴な風景には、人の死や荒廃といったイメージが寄り添う。「すごし」によって喚起される寂寥感は、西行自身に内在する無常観とも響き合っているように思われる。

「すごし」の語は、日記や物語類にもあまり見られないが、『源氏物語』では三十余例使用されている。「すごし」は、時間帯として夕暮れや夜、天候として風や雨、雪、季節では秋冬の風景に用いられていることが多い（『歌ことば歌枕大辞典』）。そのなかで、「すごし」は「艶」としても捉えられていることに注目したい。次に挙げたのは、有明の月が浮かぶ曙の空を描写した、空蝉と光源氏の後朝の場面である（本文は『新編日本古典文学全集』に拠る）。

月は有明にて、光をさまれる物から、影さやかに見えて、中〳〵をかしき曙なり。何心なき空の景色も、たゞ見る人から艶にもすごくも見ゆるなりけり（「帚木」巻）

「艶」とは王朝美を表し、「みやび」「においやか」とも類似する美的表現である。また「朝顔」巻で、光源氏は「池の氷もえもいはずすごきに」と述べている。その風景を見つめる彼の心情には、恐ろしさや寂しさ、あるいは冷たさのなかにある美を感じとっているといえよう。

では、能における「ものすごし」はどのように用いられているのか。いくつか用例が見られるが、本稿では紙幅が限られるため、禅竹作品における「ものすごし」の例に注目して見ていきたい（「芭蕉」は金春喜勝奥書巻子本、「定家」は金春禅鳳筆巻子本。「楊貴妃」は金春禅鳳自筆本に拠る。適宜表記を改めた）。

①「定家」

［上ゲ歌］今降るも、宿は昔の時雨にて、〳〵、心すみにしその人の、あはれを知るも夢の世の、げに定めなや定家の、軒端の夕時雨、古きにかへる涙かな。庭も籬もそれとなく、荒れのみ増さる草叢の、露の宿りも枯れがれに、物すごき夕べなりけり。〳〵。（【第三段】）

[上ゲ歌]夕べも過ぐる月影の、〳〵、松風更けて物すごき、草の蔭なる露の身を、思ひの玉の数々に、弔ふ縁は有難や。〳〵。
（【第七段】）

②「芭蕉」

[サシ]すでに夕陽西に移り、山峡の陰すさまじくして、鳥の声幽かにものすごき
（【第一段】）

[口]あらものすごの庭の面やな。〳〵。
（【第八段】）

[ノリ地]これも芭蕉の、葉袖を返し、返す袂も、芭蕉の扇の、風茫々と、物すごき古寺の、庭の浅茅生、女郎花苅萱、面影移らふ、露の間に、山颪松の風、吹き払ひ吹き払ひ、花も千草も、散りぢりに、花も千草も、散りぢりになれば、芭蕉は破れて、残りけり。
（【第十二段】）

③「楊貴妃」

[サシ]ありし教へに従つて、此蓬莱宮に来てみれは。宮殿盤々としてさらに返際もなく。荘厳巍々としてさながら七宝をちりはめたり。漢宮驪山のありさまも、是にはさらになぞらふべからず。あら美しの所やな。
（【第三段】）

[口]あら物すごの宮中やな。〳〵。

[サシ]むかしは驪山の春の薗に、ともにながめし花の色、うつればかはる世の中とて、今は蓬莱の秋の洞に。ひとり眺むる月影も。ぬるゝ顔なる袂かな（【第四段】）

近年、禅竹作の可能性が指摘される「大原御幸」でも「ものすごし」の用例がある。作者考定は慎重な検討を要するが、「ものすごし」の用法として着目すべきと思われる（本文は「野上豊一郎旧蔵車屋本」に拠る）。

[上ゲ歌]ふりにける、岩のひまより落ちくる、〳〵、水の音さへよしありて、緑蘿の垣翠黛の山、絵にかくとも、筆にも及びがたし。一宇のみだうあり。甍破れては霧不断の、香をたき、枢おちては月も又、常住のともしびをかかぐとは、かかる所か物すごや。かかる所かものすごや。
（【第四段】）

[問答]是なるこそ女院の御庵室にて有りげに候。

[下ゲ歌]軒には蘿あさがほはひかかり、れいでうふかくとざせり。あら物すごのけしきやな
（【第五段】）

右に挙げた四作には、先述した『源氏物語』における「すごし」の用法―時間帯・天候・季節の風景―の多くが踏襲されていることに気付く。「定家」は時雨の亭、「芭蕉」は唐土楚国の山奥にある草庵、「楊貴妃」は蓬莱宮、「大原御幸」は大原野の庵室を舞台とする。「ものすごき」風景というより、「ものすごき」場所として描かれ、より舞台が限定されていると考えられる。ただし、③に挙げた「楊貴妃」には、上掛り系統に「あら物すごの宮中やな」の詞章はない。七宝が散りばめられた絢爛たる宮殿を「ものすごし」と示し、人気のない閑寂な場を舞台とする他三作と異なる。これは、春の驪山宮で庭園を愛でた過去と対比し、今は蓬莱宮の秋の住まいに独り月影を見る楊貴妃の寂しさを、「物すごの宮中」と表したからと思われる。「物すごの宮中」は単なる風景描写ではなく、シテの心象を投影している。「芭蕉」は芭蕉の精をシテとし、「定家」は定家葛に這いまとわれた式子内親王の霊をシテとする。芭蕉や石塔に纏わる定家葛といった植物は、冷え冷えと澄んだ「ものすごき」風景の一部であり、シテの心象もまたその風景に融け込んでいるといえよう。

本稿では、作品世界における風景とシテの心象が重なり合うことを指摘した。その一方で、「定家」「楊貴妃」「大原御幸」は、貴婦人であったシテが、孤独感漂う場に居る状況が共通する。くわえて、それぞれのシテには、藤原定家の愛執、玄宗皇帝の愛、後白河法皇の執着といった、男から女に寄せられる執心がある。生前や過去の華やかさとは一転した状況設定だからこそ、シテの哀感は際立つ。禅竹は閑寂な場に女性が独り佇む設定を好み、そこに積極的に美を見いだした。

最後に補足だが、先に挙げた禅竹作品は、全て女体をシテとする三番目物であるが、異類が登場する五番目物にも用例がある。「殺生石」では、妖狐・玉藻前がいる那須野原の地を、「物すさましき秋風」が吹く「ものすごき秋の夕へ」（【第三段】[上ゲ歌]）と表現する。「すさまじ」の用法は、「すごし」の意義に近接していたことから、中世末期には二つの語意が同一視されるようになったため、「ものすごし」と「ものすさまじ」は語義の重なるところが大きい。観世小次郎信光作「紅葉狩」「羅生門」「大蛇」などにも、「ものすさまじ」が用いられ、これらの作品は全て五番目物である。シテの内面の情調を形象化した「ものすごき」風景は、やがて異類が登場する世界を形容する「ものすさまじき」風景となり、不気味さや恐ろしさのみを強調する表現へと変奏されて用いられるようになったのではなかろうか。

（東京大学大学院生）